

みめぐみの

第39部



みめぐみの

第39部



5

大谷光道著

目次

阿弥陀様と本願（九）	2
植諸徳本＝念佛	4
自力回向	7
福袋	11
誰の物	13
他力回向	15
引っ越し	17
方便	21
お札にかえて——大谷光純——	26
読者の貢	29
宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌と 本堂落慶法要の厳修についてのお知らせ	30
あとがき	31

阿弥陀様と本願（九）

先回『第三十八部』では、「阿弥陀様のお心を素直に信じて念佛し、往生成仏するのが浄土真宗の教えであることはよくわかつているが、見えない、触れない、掴めない、お声を聞くこともできない……の阿弥陀様のお心と言われても、中々容易には信じることができない。もつとわかりやすい、掴みやすい身近なものはないのか」という人のための往生の方法について誓われた第十九願について、お話ししました。

そのお話の内容は、この第十九願を詳しく説かれたのが『觀經（仏説觀無量壽經）』であるということからはじまつて、その『觀經』が「難しい修行

をするよりも念仏を称えることがはるかに優れている」と結ばれていったところまででした。

今回は第二十願です。そこには「念仏を称える者には、その称えた功徳によつてその人を往生させてあげたい」と誓われています。第十九願の中身が詳しく述べた『観経』の結論が「念仏を称えることが最高である」となつてのことと考へ併せると、第二十願は第十九願を受けていることになります。言い換えれば、「第二十願は第十九願の次のステップである」と言うことができます。

第二十願 設我得仏、十方衆生、聞我名号、係念我國、植諸德本、至心廻向、
欲生我國、不果遂者、不取正覺

私が成仏するとき、十方世界の人々が私の名を聞き、私の国（極楽）に思いをかけ、自力の念仏を積んで心を励まし、その功德によつて私の国（極楽）に生まれたいと欲したとしましよう。もしそれが成し遂げら

れないならば、私は覚ったとは言いません。

(植諸徳本の願)

十方^{じやく} 東・西・南・北、東南・西南・東北・西北と上・下の十の方角
果^か遂^{すい} はたしとげること。目的を達すること。

植諸徳本^{じきしょとくほん} = 念仏

第二十願は「植諸徳本の願」とも呼ばれ、「諸々の徳本を積み重ねた者は、その功德によつて極楽に往生させてあげよう」という願です。

ここで「徳本」というのは「善い結果を生む因（たね）となる功德」のことです。つぎに、「諸々の徳本」のところを私は「自力の念佛」と意訳しました。「諸々」なので何種類かの複数の徳本でなければならないはずなのに、何故「諸々」と言いながらそれが「念佛」なのか、ただちには納得できないところです。それで実際に、淨土門でも淨土真宗以外の淨土宗や西山淨土宗では、この「徳本」を念佛に特定するのではなく、第十九願と同じように一般の功德善根^{ぜんこん}（善い結果を生む善い行い）と解釈されています。ところが、

我が宗祖親鸞聖人は、その鋭い宗教的洞察力によつて「徳本^{ビトウ}ニ念仏^{サツリヨク}」と、仏説の真意を見抜かれたのです。その根拠は『仏説無量寿經（大經）』や『仏説阿弥陀經（小經）』にあるのですが、論証は長くなるのでここでは省略します。

前部で述べた第十九願と『仏説觀無量壽經（觀經）』との関係と同じように、第二十願はその中身が『仏説阿弥陀經（小經）』に詳しく述べられています。次のくだりはその主要部分です。

舍利弗、不可以少善根、福德因縁、得生彼國
舍利弗、若有善男子善女人、聞說阿彌陀佛、執持名號、若一日、若二
日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不亂、其人臨命終
時、阿彌陀佛、與諸聖衆、現在其前、是人終時、心不顛倒、即得往生、
阿彌陀佛、極樂國土

はじめの一 行は、

舍利弗よ。少い善根功德の因縁をもつてしては、かの国（極樂）に生まれることはできない。

とあり、二行目以下の意味も併せると要するに、

「（多善根）の念佛」なら往生できるが、「少善根の福德」では往生できない。

ということになります。

その「少善根の福德」とは、『觀經』に説かれる定善・散善のような、念佛以外の自力の修行のことを指し、そのような修行をしてその功德を極樂に回向しても往生はできない——自力の修行を積んでも往生のためには効き目がない——と説かれています。そして二行目以下を意訳すると、

舍利弗よ。阿弥陀仏の教えに耳を傾ける人があつて、念佛以外の善根（善い行い）には片時たりとも心を移さず、あるいは一日、あるいは二日、

……あるいは七日、というように、一心不乱に念佛を称え続けるならば、その人の臨終のときには阿弥陀仏がその人の前に来てくださって、すぐに極楽に往生することができるのである。

とあつて、第二十願本文の「至心回向」とは、具体的には「一心不乱の念佛のことである」と示されているのがわかります。

ここでとりあえず、第十九願と第二十願の違いを整理しておきます。

	修 行	詳しく述かれたお経
第十九願	定善・散善	觀 経
第二十願	一心不乱の念佛	阿弥陀經

自力回向

回向というのは、平たく言うと、積んだ善を極楽に向けて差し出すこと、

差し上げること、あるいはお供えすることです。その善の内容（中身）がここで念仏なので、「至心回向」は念仏を自分の善として一生懸命に積み上げて、その効力で往生しようとしている姿です。

ここで、私たちの身近な問題を取り上げてみましょう。いわゆる盆暮れやお世話になつた方へのお礼等々、私たちはどなたかに金品を贈るのは日常のことです。

一般に他人に物を上げるのは「いいこと」ですが、上げるという行為の尊さと、上げる物そのもの、つまり中身の良さという二つの要素に分けることができます。至心回向も同じことで、「念仏を回向する行為」と「称えた念佛そのもの」という二つに分けることができます。



そこで、回向する中身である念仏、すなわち「南無阿弥陀仏」はそもそも

阿弥陀様と本願（九）



何故「善」なのか、と、もつとも初歩的なところに戻つてみると、まず考えられる素朴な答は、「何のことかはわからないが、称えればいいと聞いたから、ただ呪文のように称えているのだ」というものでしょう。しかしこれでは「何故、善?」についての答にはなつていません。

このように中身のことを考えないで、ただ称えさえすれば往生できるという効力（キキメ）のみを信じて称えるというのがこの場合で、今お話ししている第二十願に従つている姿です。それでも第二十願は、このような「とにかく念佛を称える者」を必ず往生させてくださるという誓いです。そしてさらに「不果遂者」——「もし成し遂げられないならば、私（法藏菩薩（阿弥陀仏））は成仏しない」——という、強いお誓いなのです。

このように、「理由はわからないけれども、自分としては善である」という思いで称えて回向しようとすると、自力の念佛、自力の回向と言います。

福袋

さてそれでは、念佛は何故善なのでしょうか。まず、念佛は念佛である前にお名号だということです。私たちが南無阿弥陀仏と称えることを念佛と言いますが、それ以前に南無阿弥陀仏はあらゆる功德満載のお名号なのです。お名号とは阿弥陀様の側から言うとご自分の「名告り（名乗り）」で、我々から言うと阿弥陀様をお呼びするお名前、つまり念佛です。名号と念佛は南無阿弥陀仏の両面で、こちらから見るとあちらから見るとの違いです。

阿弥陀様 → 名号 = 念佛 ↑ 凡夫

それでは何故、念佛が念佛である前にお名号なのかというと、いつもお話しするように、お名号は、阿弥陀様が法藏菩薩であられたとき四十八の願を建て、計り知れない長い間の御修行の結果、今から十劫もの昔に成就されているからです。

そして、お名号はいわば「阿弥陀様製の福袋」です。いいものが入つていて、しかも何が入っているかわからないのが福袋のお楽しみです。これと同じように、お名号にはあらゆる功德がいっぱい詰まっています。そしてまた福袋と同じように何が入っているかはわかりません。それは凡夫にわからないだけで、本当の「福」つまり「善」が入つているのです。

「お名号とはどんなものか」と聞かれると、私はいつも「万行円備の嘉号まんぎょうえんびのかごう」を思い出してお話しします。これは親鸞聖人もんるいじゅしやうが『淨土文類聚鈔』に示してくれださつてある一言です。

あまたの徳を、満ち足りて円く、欠けたところなく備えた、けつこうでめでたいお名前

「あらゆる徳がそこに詰まつていて、お名号を称えることで、打ち出の小こ

植^{ヅチ}のよう^に、そこから福があふれ出してくる」という意味です。

これで、念仏（＝お名号）が善であることがはつきりしてきました。同時に、阿弥陀様が十劫の昔にお作りになつたものであることも思い出してくださつたことでしょう。

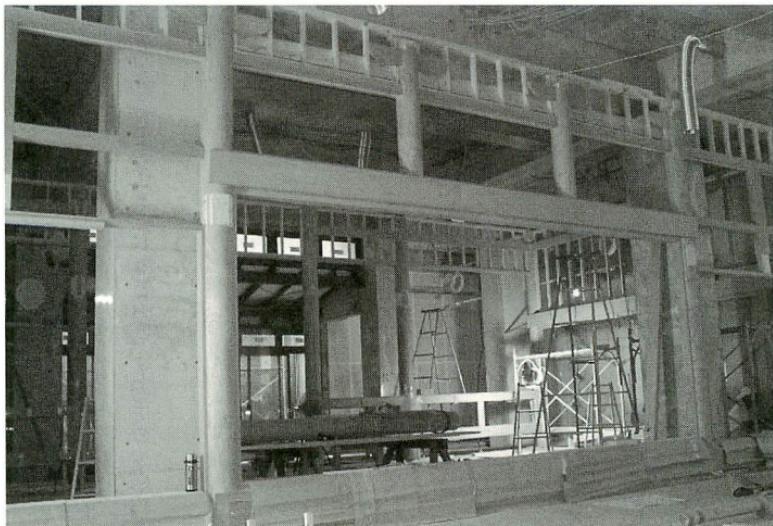
誰の物

「理由はわからないけれども、とにかく善である（あろう）」と思つて称えているうちに——自力の回向——念仏をいつの間にか自分の物と思いこんでしまつて^{いる}といふことはないでしようか。

どんな物でも使い慣れると、その物が誰のものか、何のための物かも考えることなく、あるいは忘れて、いつしか自分の物であるかのように思いこんでしまつて^{いる}ことがあります。たとえば、最近は知的所有権というのが厳密になつてきていますが、公の場所でうつかり歌を歌つたりすると、著作権

を侵害したとして、その作詞家、作曲家に訴えられたりします。また、人の作った曲を自分の曲にそのまま取り入れると盗作として訴えられます。当たり前と言えば当たり前ですが、やはり何事も物事のよつて来るところを踏まえて行動すべきですね。

この例と同じように、自力の念佛も同じ過ちを犯していることになります。念佛（＝お名号）はそもそも、自分の作った善ではないので、念佛を自分の善であるという思いで回向しようとすると自力の念佛には、とても無理がある



第二期工事で姿を現しつつある内陣

ということです。

そもそも自分の物でない物を人にあげることができないと同じように、自分のものでない念佛（＝お名号）を称えて、それを回向とすることはできません。さきに念佛を「回向する行為」と「念佛そのもの」に分けて考えることになりましたが、いま、念佛そのものについてのお話の結論——阿弥陀様製の福袋——から、もう一つの「回向する行為」についても、その行為が不可能であることが一緒に明らかになってきました。

他力回向

親鸞聖人はこれを不回向ふえこうと仰いました。不回向とは「回向しない」ことです。それで、回向は逆に阿弥陀様のほうからしてくださるので、他力回向と呼ばれます。他力の他とは、他人の他ではなく、他＝彼、つまり「彼方からかなた」という意味なので、くれぐれも誤解のないように願います。

回向は平たく言えばお供えすることだと言いましたが、お供えは阿弥陀様のほうから私たちにしてくださるのです。これで、回向の方向は逆で、お名号——阿弥陀様製の福袋——もその作者・阿弥陀様から送られて（回向されて）くる、という全く矛盾のない、本来の姿に合うことになりました。

ここで、さきの他力念佛による往生を誓われた第十八願のお話の中で「至心信樂」とあつたのを思い出してくださいたいのです。第二十願の「至心回向」と比べると、その違いは一目瞭然です。「至心信樂」は「とにかく楽しい」ことで、「至心回向」は「とにかく回向する」ことです。「至心」を「とにかく」「何が何でも」「ひたすら」「がむしゃらに」などと置き換えてみるとわかりやすいでしょう。自分を励まして回向するのはたいへんですが、阿弥陀様があらゆる徳の詰まつたお名号を回向してくださるのですから、楽で嬉しくて、喜ぶしかないのです。これによつて、私たちの称える念佛は、善としてこちらから回向するための念佛ではなく、阿弥陀様からいただ

いた御回向をありがたいと喜んで、お札を申し上げる（御恩報謝）お念佛となるのです。これが、私たちの目指す他力の信心、他力の念佛なのです。

自力と他力の比べようもないほど大きな違いを、おわかりいただけたものと思います。

引っ越し

はじめは第十九願・自力修行の仮の教えに身を置いていたが、次には第二十願・自力念佛の教えに入り、遂に今、第十八願・せんじやく選択本願（四十八願の中で根本となるから選択本願と言う）の他力の真実門に転入した。速やかに自力念佛の心を離れて、他力念佛の往生を遂げようと思う。阿弥陀仏の果遂の誓いはまことにわけがあるのであるのだなあ（本文末尾）。

これは、親鸞聖人が『教行信証（化の巻）』にご自分の信仰の深まりの過

程を振り返って、そのよろこびをお述べになつてゐる部分です。またこれは、私たちが念佛往生の道を求めていくについての指針として、親鸞聖人が御自ら身を以て道を示してくださつたものと、いただくことができます。

第十九願に誓われた往生（化土）

第二十願に誓われた往生（化土） （報土）

第十八願に誓われた往生（報土）

の順で心持ちを翻しながら新しい信心の世界に移つていくという、この浄土真宗の信心のモデルは、第十九願→第二十願→第十八願と三つの願に転じていくという意味で、「三願転入」と呼ばれています。

親鸞聖人はこのおことばの終わりのところで、「果遂の誓い」に深く詠嘆されています。この「果遂の誓い」とは第二十願のことで、第二十願はその本文の最後にある「不果遂者」から「果遂の誓い」とか「不果遂者の願」とも呼ばれ、これは「植諸徳本の願」の別名です。「不果遂者」は「植諸徳本

（自力の念佛）」とともに第二十願の重要な柱となつてゐるため、この別名があるのです。「不果遂者」は、「果たし遂げないならば、……」つまり「極楽に生まれられなかつたら……」という意味なので、「必ず我が國（極楽）に生まれさせてやる」という阿弥陀様（法藏菩薩）の強いご決意の現れです。

「果遂」についてはさきに少し触れましたが、ここでもう少し注意すると、つぎのことがわかつてきます。

私がいつも述べているように、極楽の、それも報土と呼ばれる中心部に生まれるためにには、どうしても第十八願の信者（行者）にならなければならぬのですから、「果遂」は「必ず第十八願の他力念佛の信心を獲させてやる」というもつと深い意味をも持つてゐるのです。

つまり、「果遂」には二重の意味があつて、

第一の意味は「自力の念佛によつて化土（自力の行者のための仮の淨

土）へ往生させよう

第二の意味は「第十八願の信者とさせて、報土へ往生させよう」という、阿弥陀様の深いお慈悲が伺われるのです。こう思つて聖人のおこぼをもう一度拝読すると、聖人が「夫々の願に身を置かせていただいてきたが、今、最高の到達点に達することができたのだ」という、無上の喜びをお述べになつてゐることが、いつそう身に迫つてきます。

「転入」ということばは、日常的にも戸籍や住民票などに使われます。これと同じように、三願転入は三つの願に誓われた夫々の世界に引っ越すするのだと考えれば、いつそうわかりやすくなります。夫々の願には夫々の往生の方法、報土や化土という夫々の行き先が誓われています。そしてまた、三つともが阿弥陀様の懷かいまなのです。この場合の引っ越しは引っ越しする度に良いところへ移るので、行き先が必ずしも良いところとは限らない日常の引っ越しとは、そこが違うかも知れません。



披露宴にお祝辞を下さる青蓮院・東伏見慈晃猊下

右は祖母・大谷智子前裏方のおぢあかを着られた光純新門様、五月八日

方 便

翻つて見ると、はじめの第十九願
の教えに入るところから数えると、
三回も引っ越しをすることになりま
す。何故このような回りくどいこと
をしなければならないのか、とも思
われてきます。その原因は教えの側
にあるのではなく、行者の側にある
のです。つまり、いきなり他力の念
仏は称えられない、という現実があ
るからです。先部（『第三十八部』）
でも述べたところですが、いきなり

阿弥陀様の本願を信じよと言われても、つかみどころのない阿弥陀様を信じられるものではありません。

阿弥陀様とお釈迦様は、このような凡夫が、ついには第十八願の教えに入つて行けるようにわざわざ回り道を作つて、導いてくださつているのです。これを方便と言い、方便とは手だて、手段のことです。わざわざ別のところに一旦導いて、そこから本物のところへ連れて行く、遠回りのようだけれどもこれが一番早い、急がば回れ、ということですね。

さて、阿弥陀様、お釈迦様がこのような、まことに大がかりな方便まで用意してくださつていることを、頭の中ではその意味が理解できて、各々の願のイメージが湧いてくるようになったのだけれども、その心持ちが自分のものになつて、お念佛の信心のありがたさが体中に行きわたるようになつてゐるかというと、どうでしよう。

それでは「やはり……」ということで、実際にすべての修行をやつてみる、

つまりまず第十九願の教え、さしあたり日想觀にっそうかんからということで、定善・散善のすべてを行つてみて、その行き詰まり乃至何らかの納得の上で、つぎは自力念佛をはじめて……、と進まないと、三回の引っ越しはできないのでしようか。

それをやろうとする気力もさることながら、現実の諸々の制約の中で、それはかなり、あるいはほぼ不可能な選択です。

いつも申し上げるようすに、浄土真宗はなんと言つても聴聞が日常の修行と言えると思います。お説教を聞くこと、本を読むこと、その他宗教と無関係の場面も含めて、あらゆる日常生活の各場面の中で自分自身に問い合わせみることが、そのまま仏様のお声を聞くこと、つまり聴聞と言えるのです。

このような生活の中で、この方便のお蔭で自然に三回の引っ越しに行われていくのです。ただその中で、「次の引っ越し先について知つておくこと」はまことに大切なことです。ちょっと観光旅行に出かけるにも、予めパンフ

レットによく目を通しておくと、はじめて見た珍しい景色にもすぐに馴染みて「ああ、このことか」と受け入れやすいものです。

そしてそのとき、「必ず第十八願の信者に育ててやる」と仰った阿弥陀様の果遂のお誓いが、親鸞聖人と同じように身に染みてきて、お念佛を称えている貴方ご自身を発見されることでしょう。「親鸞聖人は特別の方だから三願転入なさつたのだ」などと考えないでください。だれしも三願転入を味わつて第十八願の信者になるのです。聖人が特別の方であるのは、信心を頂かれたからではなく、身をもつて私たちにその道を示してくださつたからだということを、忘れないでください。

是を以て愚禿釈の鸞、論主（天親菩薩）の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依て、久しく萬行諸善の仮門を出でて、永く双樹林下の往生（第十九願の往生）を

離る。善本徳本の真門に廻入して、偏へに難思往生（第二十願の往生）の心を發しき。然るに今特に方便の真門を出でて選択の願海に転入せり。速かに難思往生の心を離れて難思議往生（第十八願の往生）を遂げんと欲す。果遂の誓良に由有る哉。

（『教行信証（化の巻）』より）

論　主＝論の作者。ここでは『淨土論』を著された天親菩薩
宗師＝曇鸞大師・道綽禪師・善導大師・源信和尚・源空上人の祖師



お札にかえて

大谷 光純

去る四月十一日に結婚式、五月八日に披露宴を、おかげさまで無事に終えることができました。私たちの結婚にあたり、皆様より温かいご支援を頂きお祝いくださいましたこと、この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。



式三献

結婚式は、四月十一日、本願寺仮御堂にて行いました。

一般的な結婚式は、司婚者が式を進行しますが、今回は新婦自らが執り行うという、少し変わったものでした。この形式は、本願寺において代々行われてきたもので、式の流れをご紹介しますと、とうこうざ登高座、ひょうびやく表白、けんぱい献杯、しきさんこん式三献（いわ

ゆる三々九度)、新郎焼香、勤行です。

ごんぎょう

昨年三月の得度式と同様、古式に則った形で式を挙げられたことは、私にとつてまことに有意義な経験でありました。わずか一時間ほどの式でありながら、いずれ負うべき責任の重さを痛感するものとなり、生涯忘ることのない一日となりました。特に、

敬つて、彌陀如来、宗祖聖人、歴代善知識照臨の影前に白して曰さく

ではじまる「表白」は強く印象に残っています。その内容もしかり、私が筆を執つて書き、宗祖聖人やご歴代の御影前で読み上げるということ自体、初めての経験で大変な重みを感じました。

また五月八日の披露宴には、本願寺関係の僧侶・御門徒代表はもとより、各界の方々にお集まり頂きました。宗祖親鸞聖人はじめかつては御歴代も御得度を受けられた、本願寺と特に御縁の深い青蓮院の東伏見慈



表白



した。

晃猊下を主賓としてお招きし、慈悲について心に染みるお話を頂戴しました。

衣装としては、亡き祖母が結婚当時に着ていた「御地赤（おぢあか）」で入場しました。百年近くも昔の着物ですが、鮮やかな赤の振り袖で、結婚を機に皆様に披露できたことも、披露宴のよき思い出となりました。

文字通り、得度により「非僧非俗」、結婚により「肉食妻帶」の立場となつた私。これらの言葉については父から聞かされてきたところですが、その深さ、厳しさをこれから身をもつて学んでいかねばなりません。

新しい生活にも大分慣れるとともに、腰を落ち着けて勉強できる環境になりました。教学・声明・書道などに引き続き取り組んでいます。

読者の頁

富山県 河合 寛さん

問

みめぐみのを通して御教えを頂き、ありがとうございます。御文五帖を毎朝、順番に拝讀しているのですが後生ということがたびたび説かれています。後生と後世との意味をはつきりと頂戴したいのです。説教、法話を聞くことも多いのであります。今、私の身にどういただいたらよいか、この点について御教示ください。

南無阿弥陀仏

合掌

編集部註＝河合さんのご質問へのお答えは、紙面の都合上次号に掲載させて頂きます。

感想意見

東京都 鈴木健太郎さん

何故地下御堂なのかの御説明を拝見して、嵯峨の美しい自然を守るため厳しい建築規制があることを知りました。規制の中で工夫を尽くされた素晴らしい名案だと思います。

宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌と

本堂落慶法要の厳修についての お知らせ

私どもお念佛の日暮らしをする者にとつて最大の機縁となる宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌を来年五月に厳修致す旨お知らせしておりますが、その日取りが決まりました。

また、本年五月に第二期工事が着工となつた本堂は、予てより落慶法要を本年十一月に厳修致したき旨お知らせしておりましたが、内部の設計や仏具のグレードアップのため、来年五月に延期することになりました。

謹んでお伝えいたします。

平成二十三年五月十六～十七日 本堂落慶法要

平成二十三年五月十八～二十日 宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌法要

本願寺寺務所

あとがき

みめぐみの刊行委員会

光純新門様のご結婚式も滞りなく終えられ光道台下、禮子裏方も喜びのうちに
も、ほつと一息。そんな中にこの『第三十九部』の執筆にあたつて下さいました。
第十八願・王本願、第十九願・修諸功德の願とそして今回の第二十願・植諸德
本の願と三回続けて一願一話ずつ、光道台下の想いが響いて参ります。「阿弥陀
様と本願」シリーズは一話毎の完結ではありますが、特に今回の「三願転入」を
キーワードに、もう一度前の第三十七部、第三十八部を読み返して「阿弥陀様の
果遂のお誓い」を知り、「親鸞聖人と同じように、お念佛を称えている貴方ご自
身を発見されることでしよう。」とのご教示を味わつていきたいものです。

そしてまた、光純新門様にご婚儀を終えられた今、「お札にかえて」と題する
お言葉を寄せて頂きました。今後も折にふれ、ご近況などを寄せて頂きたく存じ
ております。

台下とのキャッチボール、ご質問・ご感想お待ちしております。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』 1冊の価格は200円(税込)です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料 1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円

○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊＝210円、7～9冊＝290円

○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

みめぐみの 第39部

2010年7月5日 印刷

定価 200円

2010年7月10日 発行

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社



みめじみの刊行委員会刊